

ルクセンブルク戦記

2015 世界パワーリフティング選手権大会が現職の IPF 会長のガストン・パレージ氏の肝入りとお膝元であるルクセンブルクで開催された。

同時に 4 年毎に開かれる IPF の総会に出席して頂く為に宮本会長にも渡航願ひ隣席して頂きました。総会では主だった事柄で以下の件が決まりました。



IPF のエグゼクティブ役員選挙では無投票で会長のガストン・パレージ、事務局長のロバート・ケラー、などが再選されたが、副会長は選挙となり現職のジョニー・グラハムとアイスランドから立ったセギルジョン・ペターソンの一騎打ちとなり僅差で再選ならず新任となった。さらにボードメンバーでオセアニアの担当役員ロバート・ウイルクスが辞任。この項に於いては個人的な見解は避けるが、ご両名ともに日本協会にとっては良き理解者であっただけに他の役員ともこれからの関係を築き直す事が命題となった。

ちなみにアジアの会長であるファルシド・ソルタニはイランである事からビザの問題があるとしてボードメンバーはカザフスタンのセルゲイ・キムが務めている。が、この日はアジア・インドアゲームの調整の為にトルクメニスタンに赴いており総会を欠席している。

今回の総会より新たに技術委員長もエグゼクティブに加えられる事になり最近よく国際大会で顔を合わせる再選された南アフリカのヨハン・スミスが今後も日本の為に身を粉にして働いてくれる、と小職に約束してくれている。理由はラグビーワールドカップで日本が南アフリカに勝ったから。次の 2019 年までは安泰だと二人で笑った。(以上、敬称略)

他には「ユニバーシティー・ワールドカップ」との仮称のいわゆる世界大学対抗戦の開催。

総会の翌日の EC (エグゼクティブ) 会議による向う 3 年間の試合の内定。ちなみに大きな変化は来年よりノーギア (クラシック) のベンチプレスの世界大会が開催され 2016 年は既出のヨハン・スミス氏の肝いりで 5 月に南アフリカにてなんとギアとノーギアの全カテゴリー (ジュニア、サブジュニア、マスターズ、オープン) を同時開催する事に。2017 年からはノーギアベンチの全カテゴリーを 4 月に、ギアのベンチの全カテゴリーを 5 月にそれぞれ分断開催。

注目の日本（神戸）が立候補していた 2018 年だが内定を見たが当初に準備していたギアのオープンの大会だけでなく上記の全カテゴリーでの開催が義務付けられた。IPF からの期待は大きい分、難しい舵取りを余儀なくさる事となった。

以上が主だった決定報告です。

さて、試合が始まります。

それにしても「これが世界最高峰の大会なのか？」と疑いたくなるものばかりだった。その分、各々の選手の皆さんには負担を掛けているのが忍び難い。滞在ホテルも宮本会長も言及されているが良い言い方をすれば「大変、環境の良いホテル」しかし試合で必要なのは利便性なのでホテルのグレードは例え下でも会場までの移動時間や周りの住環境を優先して欲しかった。

国際委員会としては（或いは渡航業務を請け負って貰った(株)PINK 社）最初のエントリー前からホテルの確保は団長である小職の意を汲んで頂いて適切に連絡しているにも関わらず「日本選手団には KIKUOKA ホテルを薦める」と。その後の交渉もガストン氏本人の裁定で。

その滞在ホテルの周りには事前の調査でも飲食店やスーパーなどはおろか民家もない。「隔離」という言葉が脳裏に浮かんだ。街に出ようものにもタクシーを呼んで 50 ユーロは掛かる。辛うじて迎いのバスがほぼ時間通りに来てくれたのは幸いだったが頻繁でもなく会場まで 30 分は掛かった。

会場そのものも全日本…いや東京大会？と思わせるくらいの規模。

セキュリティーパスが来ない？帰りのバスがいつ出るのか？他のスタッフに聞いても「ガストンに聞いてくれ」その全てに管掌し全てを仕切っているのもガストン自身だった。まるで彼はスーパーマン？挙句には滞在 2 日目に「朝食でフルーツとかパンを部屋に持ち帰るな！」とお叱りを受ける。ホテルに滞在している他国の仕業だ、と伝えると「それはわかっている」とも。その他にも「メシを会場で食ったらゴミを外に捨てる！」

肝心の試合そのものは上記のような条件でありながら日本人選手の全てが無事に完走。福島友佳子選手の世界記録の達成と金メダル獲得に象徴されたように多くの選手が世界の地で自己ベストを叩き出した。もちろんそれぞれの反省は生まれている。それは決して現状では満足しない向上心の現れで、それがまた強さに繋がる事を願う。

このように日本人選手も健闘したのだが、さらに世界は高みを極める。男子の中重量級になると顕著だ。ひと言で表せば今まで日本人選手はギアの使い方・効かせ方に卓越していた、かと思われたが上位入賞者やメダリストは日本人選手よりもさらに研究が進んでいる。そのような対応とトレーニングを積んでいるのを突きつけられたようで少しショックを受けた。「自力（地力）」だけ強いのではない事を思い知らされた。

少し不可解だったのはサイドレフリーの位置。プラットフォームのラックの真横にプレートラックが置かれていたので（補助員が負担なく付けやすいから）それが邪魔になり視にくい事からスクワットの際にほとんどデッドリフトに位置（つまり前側）に配置されていて、その事で本来の「高さ」でなく「身体（上体）の前傾」などの印象で赤を貰っているような気がした。

替わりにベンチプレスの際にはうんと後ろに配置され「お尻の浮き」に関しては寛容だった気がする。その件をスミス氏に質問（抗議ではない）したが「ルールではそこまでの規制はないがオマエの言う通りだ」としたうえで「条件は一緒だから」となんともハッキリしない答えと冴えない顔。ちなみに先日の世界マスターズパワーでは逆の事があり（スクワットでサイドレフリーが後ろの位置）「おかしいじゃないか？」と言ったらすぐ直してくれたのだけど。

日本人選手の多くがスクワットの第一試技を高さで落とすケースが。それでもその後にちゃんとしゃがんで皆が完走したばかりかベンチ、デッドで多くが素晴らしい闘いぶりだけだけに、スクワットの一本目を取って波に乗ればさらに展開は有利となったはず。スクワットはちゃんとしゃがまないとダメなのよ。



さて、そんなこんなで大会も終わりクロージングバンケット。これも今まで出た大会の中では…いや、いや。もう、これ以上はやめときます(笑)

どんな条件であれ試合（大会）は結果が全てです。舞台裏のゴタゴタは言い訳にしかありません。そんな苦しい条件の中でも精一杯に頑張った選手の皆さんは本当にお疲れ様でした。いろいろと、しんどかったですね。

それでもガストン・パラージ氏からは別れ際に「これから出来るだけコミュニケーションを取ろう。日本の事は頼りにしているし期待してるよ」とウインクしてくれた。きっと本当は気の良いおっさんなんだよね(笑)

別れ際には「今回は本当に来てくれてありがとう。どうか気を付けて無事に帰国してください」と言ってくれた時の IPF 会長はとても紳士だった。

2015 世界パワーリフティング選手権大会 日本選手団 団長 山口真人